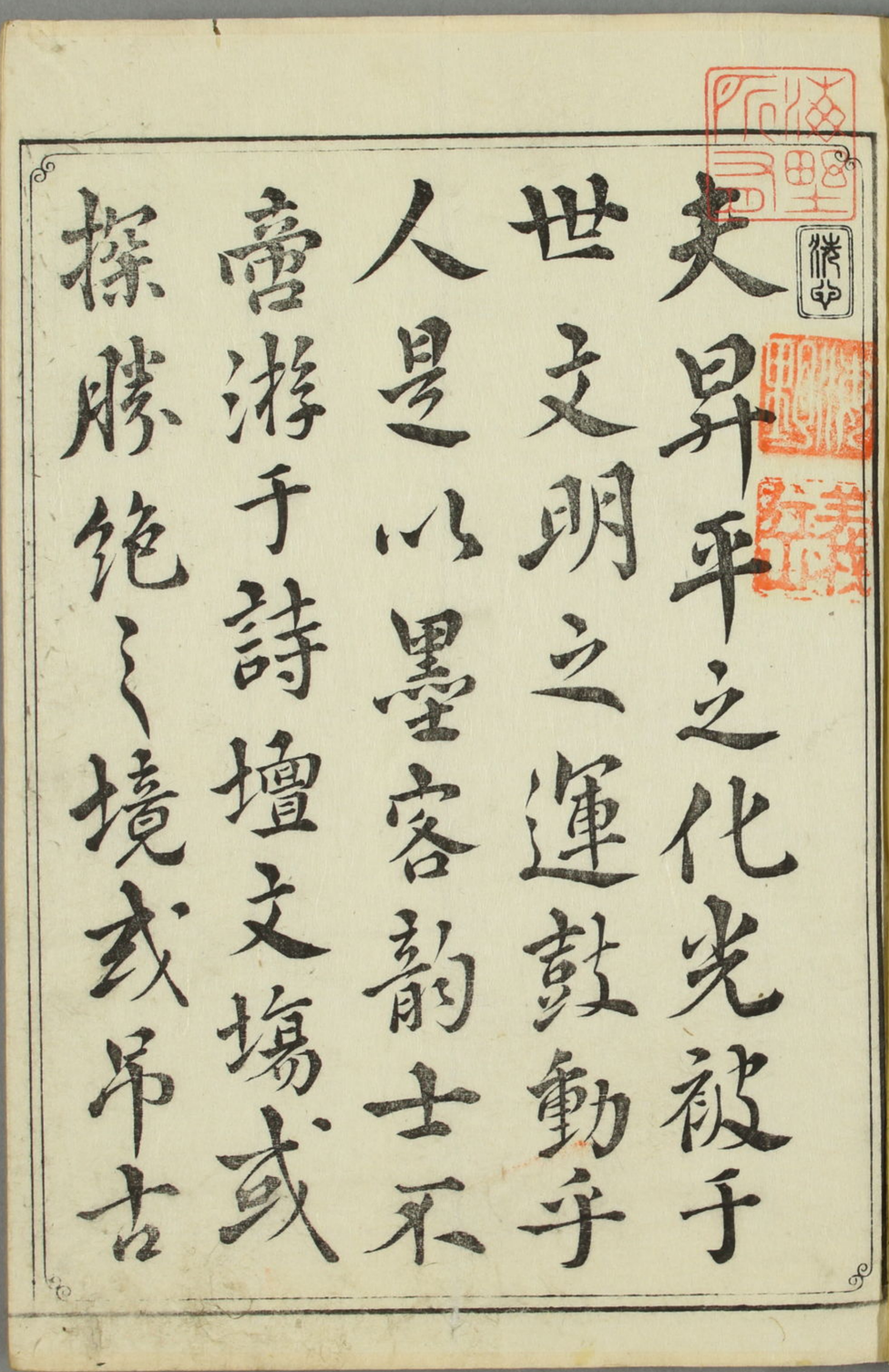
巖島繪馬鑒

初編

嚴嶋扁額縮畧



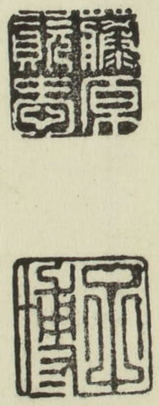
文昇平之化光被于
世文明之運鼓動乎
人是以墨客韵士不
啻游于詩壇文場或
探勝絶境或吊古

跡搜金石旁及賞鑒圖
畫千里〻路不亦辭遠
趁其一所好以極遊樂
余也居恒蹐濁
京輦之下不能輙窺
都門之外故每獲摸
某筆蹟圖某景地者
輙展觀不釋手以換
跋涉〻步以慰企望之
懷有年于茲頃日藝州

千歲圖之人獸寫
巖祠所揭〻扁額勒成
冊子遂上諸梓且縮嶋
之金景圖之冊端彼嶋之
爲勝海内之甲而其諸扁
亦今古〻妙選也託人需
余題言余神飛眉舞不
辭其拙乃領諾此華爲
明時〻佳事而藝苑
之清供也固不待言宣

可謂吾輩書舫〻好
寶而膏肓之良劑也
哉於是深翰以賀同
癖且自紀其喜云
天保壬辰閏十一月

前權大納言藤原資愛



題

閩陽

嚴島扁額縮本

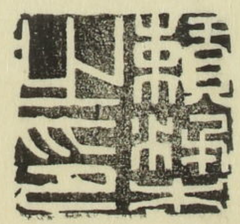
市杵之神瀛海社遠近瞻
謁人傾瀉爭獻扁額禱賽
者書畫爛燦照廊庑裏有

名筆世所寡筆力入神極
鳥雅非唯夜闇蹄齧馬鎧
士鬪擊鳴刀把曰非馬也
其人也只恐神物佚去我
又惜風雨所撑撦丹青剥
落僅殘灺何人妙手巧摸
寫頰上三毛非苟且此本
到處誰肯捨一覽宛如入
神廈休問大小與真假貌
取尤物傳天下

天保改元明年春二月

杏坪頼柔書于三

休亭



抵百くしとかしこき神の宣居給ふ事
なるとはさとりぬ世を乃ぶるとも
もすえぬ限いまも忘れぬ国まも有
とかゝゆる所社こそ多くかゝ知られ
ぬ有をかしこゝ中にも吾嬬山根
の大宮植姫とし記をもかたほとゝ三
の品津乃廣前よ年一度人の掲奉
迎新忌まくいとまなくゆし記大行の
始て世度かのこの百舟八間の廻廊以
もさゝ有京擬殿のいろとゝもなくたち

はらの世にたまたまの人の光信元信松栄丸迎をよりて
ものの海に進ずるこゝろもあらはるゝ
浪のふかるゝ色のはなやかなるは
水のながれにまかせ
ながくしかりてこゝろ
くれなゐの花にまがふ
なをこの色人のこゝろにもとまる色なり
一花を古代の永正天文の始の句にあはせ
西行の人光信元信松栄丸迎をよりて

今は世にたまたまの人の光信元信松栄丸迎をよりて
この花と色せるものゝいとはかなきを
彩色花鳥の雅を好む方錦をなす境
見ぬ所の孤をもつて集めたる桜
木を初めて見んむしてまつはのまとりこむ
さらにこゝろもひかれ思ふ境
ふ屋をして世界の色をまたしるのや
をもつて人の世界の孤をとゝして世社をまゐ
木のことにこゝろと慰めをもつて画ぬるむ人
見ぬ人をもとめさせをもとめさせをもとめむ

或ハ花の賑ひ中にもちろ〳〵ハ唐の国さ傳
し草花多達りとてなむ志らぬれ秘とさハ
りう多き樹の中にわ只一ト本に探あつま
りて古今まれなる珍人これ画にうつさと
写しともらせ給ひしハつくしうわか毎の唐なりし
そハとまれ絡編てゆつりて書ぬへしあつめの
くしつるに一立ととの摺れなの書にて作
をのそむくのそいとこの傳しくおこりし
にもそそつくそれと印南野のいぶとぬ書と
條文をと綴き縁辺してこへ志らを余朋
とらの事にはらうなしぬ志もららむつまく
かつハ我らやしろやいつあよし校しきから
くしてな序

文政十とせ丁亥歳菊月

柳守梅道野坂元貞

書于鹿猿屋

自序

佐賀郡の大宮人まちに御覧するものこそ屋かまの海
人をとめともう見るも月毛さおちゝものなるら
その見る人からふよりわらく光もうそり色もまとも分ぬやう
ゆいつをとつ孔あるの数言と不すきとまるもの形るへ
ゆきた蓼くふ虫もとゝ絵もきこえ仏法ゝて九万年ゆ
きく数言とゝふもいまゝ人間の世ほゝ〳〵ふゝあわけき
れの御弘角のまるより面白きて父母の片目をこのひ
てもまの神社かゝ〳〵と仏御国をたつ弘く法人の芋宮

進まる往馬ふなかぬ入て世ゆ〻ゆる年をも忘らさりき
ゆきと何の板とつゆ年をもあのれも忘らすたゝ見侍るよ
数ふ〻ふくそゆりけれ越のころ一度いつゝ歯の大宮ふ系
浦せ一ふゆ一も慶ゝ侍る殿字也廟様社未社よいつる
俗く画数めゆう羽よ重絵てうゆあれゆるたゝゝくいかて
この俗くこの俗人と移らさやと念一侍つるこそたかゝ毫
越れの後四季をゆくふ渡海一ゝたりふめくゝ太平
世ゝまゝゝふたひる百度ゆるれとも侍紀まあゆぬ心もいや海
なりまふよわ画調る侍ゝれ者れ絶波の浦社のとの

と我たれつきゝたひゝ目よも土佐光信特理元信也信
方近等の系嘉我ゝ新ふ水墨の激姫丹まゝ侍ふ絶侍らる
感快ふたゝ寸絵ふ云義ふなく侍るにもれ一侍ゝ元等の墨
痕今ふゝ後年ゝ神津渤風ふ姫きゝ侍らさ毫第ゝ弥山の
嵐ふゝ侍ゝ侍ふ紀侍渡もつきゝゝゝ紙絵もやふれ失ん
年心もとれきれ侍ゆ乃宮いん一年ゆゝ侍ふくも百十七文
字乃道の師隼光岡の大人ふ侍ふ今の絵ん侍きこえけきハ
何象ひゝめ新心ふ者の天ゝ乃ふ伊勢大神宮の宮ひふ紙諸れ
外まゝ河年ふハ侍ふとまゝ高ふ海めゝ毫一をゆふ年

ちかうとあやゐわれきと打消深の数寄去わうくいかもし
て絶ぬのもれ斗抜を改写して社頭の寶庫のはるも
細めおき那八子年の古ゐくゐ不朽のことならんと猶うち
志抜書特比ひ〻ひ抜かな間て寶庫の年八ちもゐらハ
あき其年の序ふ黄弦馬梓ふ彫せて同くハ廣く
世の人と共ゐ樂しめかし千載不朽の業あれて同しとゐな
うちゐ請ひるを人や樂ゑ抜同しうせとハやきしくもと
おもひゆゝしぬ彫もおれきう数寄みかこん寄られたるに義
ゐらめち雅ん賢愚をお那郡種俗あひともにはう夜樂ゐん

為めとて夏ゐ古今の異蹟ちゐ海しへ且て弦ふの
ゐ彫小説をかゝさらゐ書加へく先初海一新出輝のるゐ
あゝ為ぬる哉 天保二年三月廣為人菴

凡例

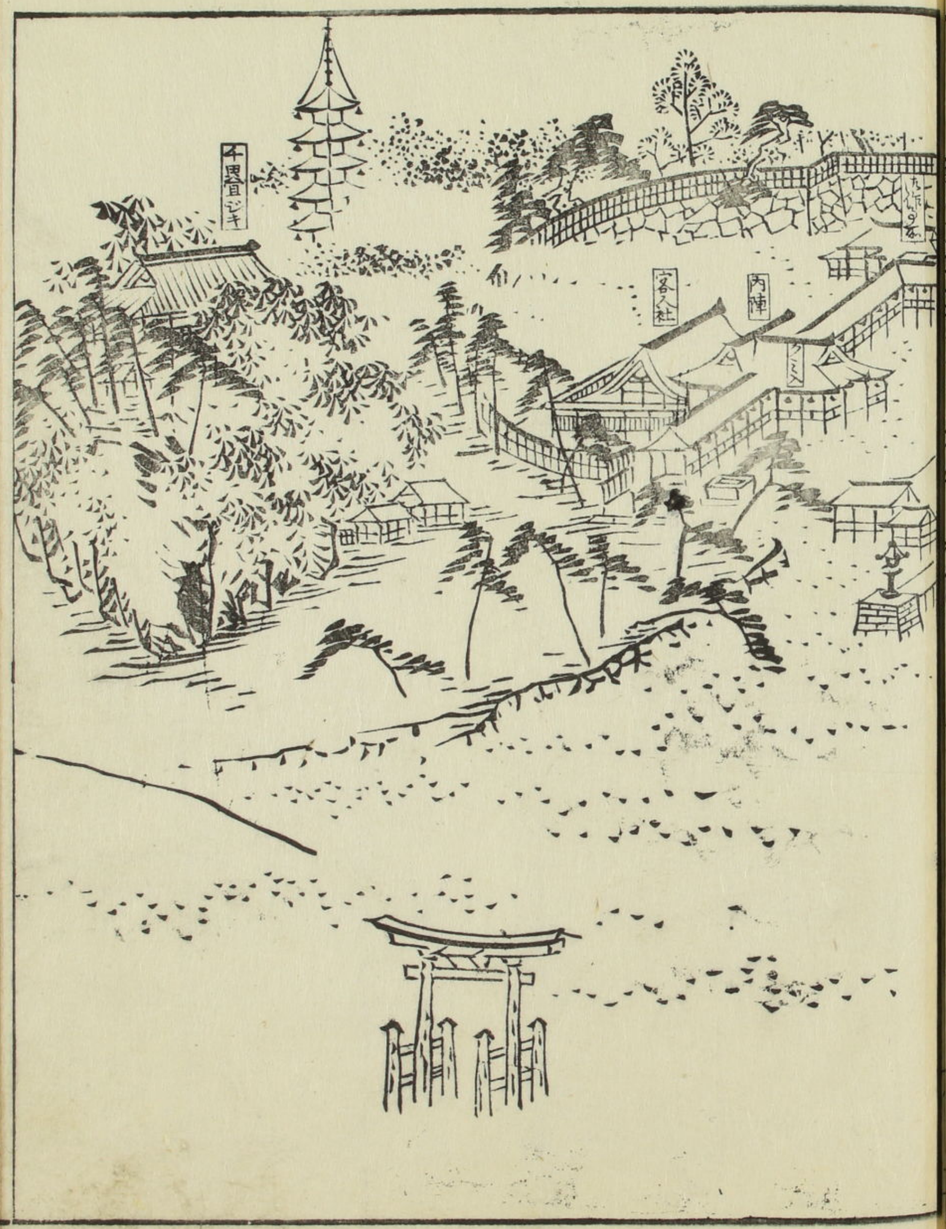
一當社ふ掲る所の繪馬乃數を尋て幾千枚とゝふこと知
なくゝ且一度梁上とり落るものゝふくゝびこれを掛
ぢ但古畫名筆ハ如きハ卷て藏ものゝ乃りそれゝハ
後編ふ出ス

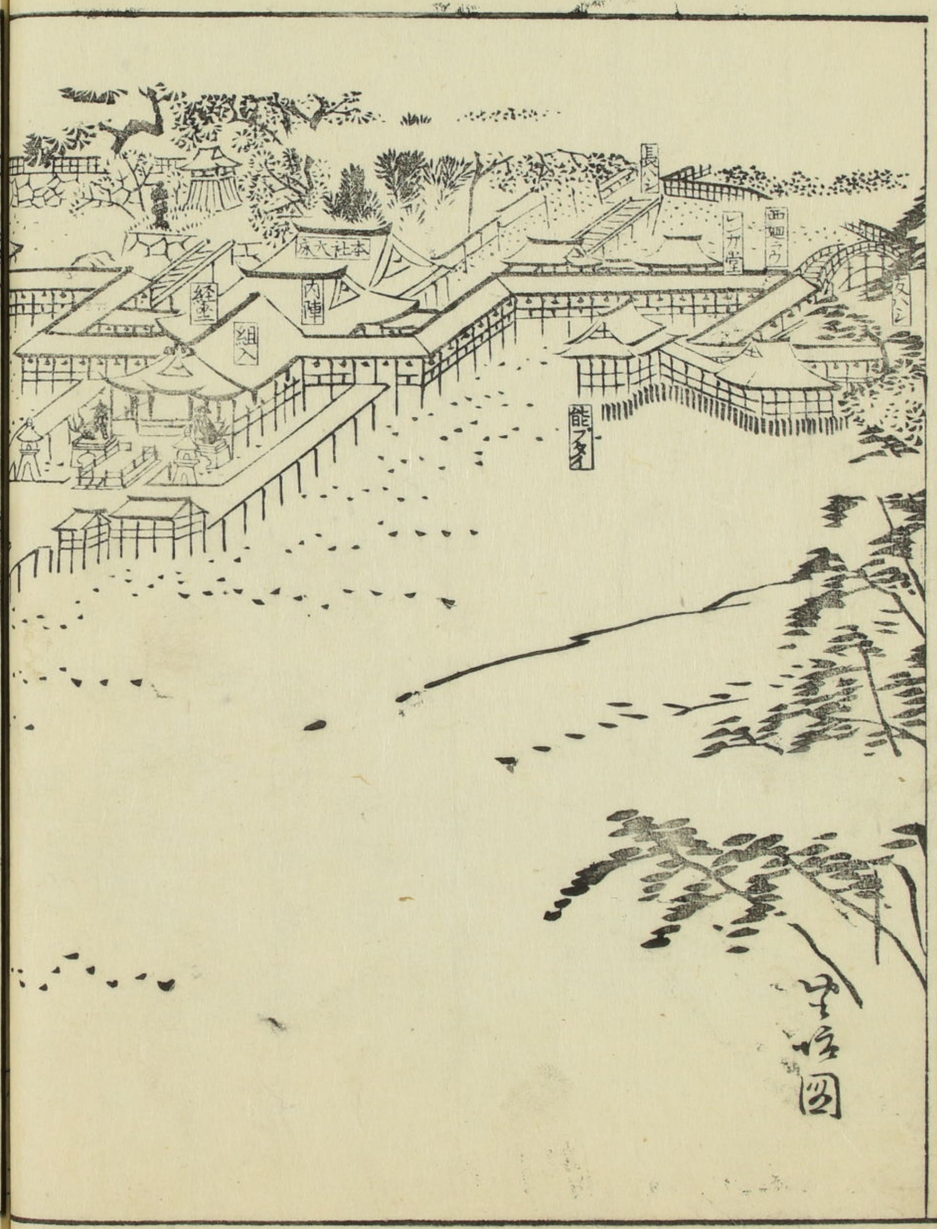
一社頭の全圖ふ東西南北をとゝし内陣外陣を
ゆゝゝゝゝ繪馬の掛どゝ乃ゝゝびく為ゝり

一今ゝの初編ふ出ゝゝゝゝゝゝゝハ第一兒童の目を悅し
めんゝめゝいへども書畫にハいてゝ作者乃筆意
毫毛も違ぢ摸寫ゝゝゝゝゝり

一古法眼元信ゝゝ古代の名畫筆ふ暇ゝゝ

とへども同筆同圖多けれども相分て二編三編ふ
是を選集る
一諸家高貴の傳寄附數多これあるとへども姓名
圖中ふ見えざるものをもつてこれ
一作者のもれ落ものあるとへども筆ふ妙あるか
その年次乃古きものハ亦これを出る
一間ふ今時泛しの繪馬を交へあるものを或を
童蒙の目を慰さるふるしく又を其風を好む
人ふ從て其觀を通ぜんが為あり
一所〻ふ古筆書蹟或を器物等を出るものを
見者の畫圖ふ厭んこころを轉ぜんとて
一諸名人の題名常ふ人の口ふ膾炙せるものをもれど見も
一ツ二ツを出て同好の諸君ふ示さを
一其圖畫ふ係る故事を贅附せるものを童蒙此
畫帖を見て又その談柄を得の端ともあるべき
ふり故ふその說の得失可否ふ至てを強て正る
事をせず只閭巷ふへいるべく說を擧るを





中宜図

嚴島扁額縮本初編卷之一

目録

大鳥居額 表裏
橋辨慶之圖
朝比奈草摺曳之圖
牛若丸之圖
田植之圖
厩馬之圖

鷹鳥之圖
内侍之圖
石川丈山之書
三福神之圖

初編巻之一目録終

嚴島扁額縮本初編巻之一

藝陽　千歳園藤彦著

○宸筆の額

竪八尺三寸
横四尺二寸

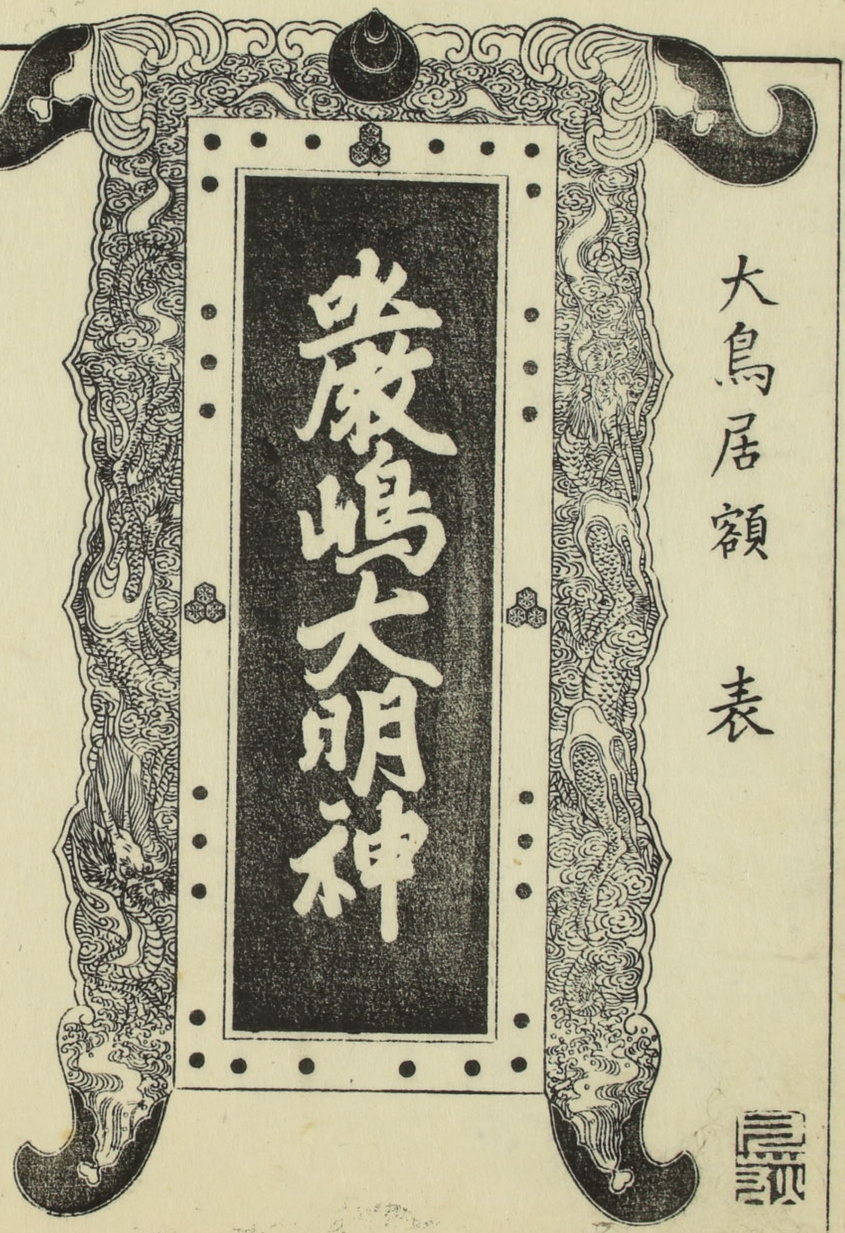
大鳥居ふまれを掲

人皇百六代後奈良院の宸筆あり今拜寫せるところの字を宸翰十分一の圖あり　但往古の額字ハ表を小野道風筆裏を弘法大師の筆なりしが損して見分ざし今大願寺ゑ秘藏せるところ是あり嚴島道芝の記にもこの兩筆櫻尾の寶庫ゑ藏ありしが神主滅亡の時燒失せしとぶらいづれも是あらこと未考

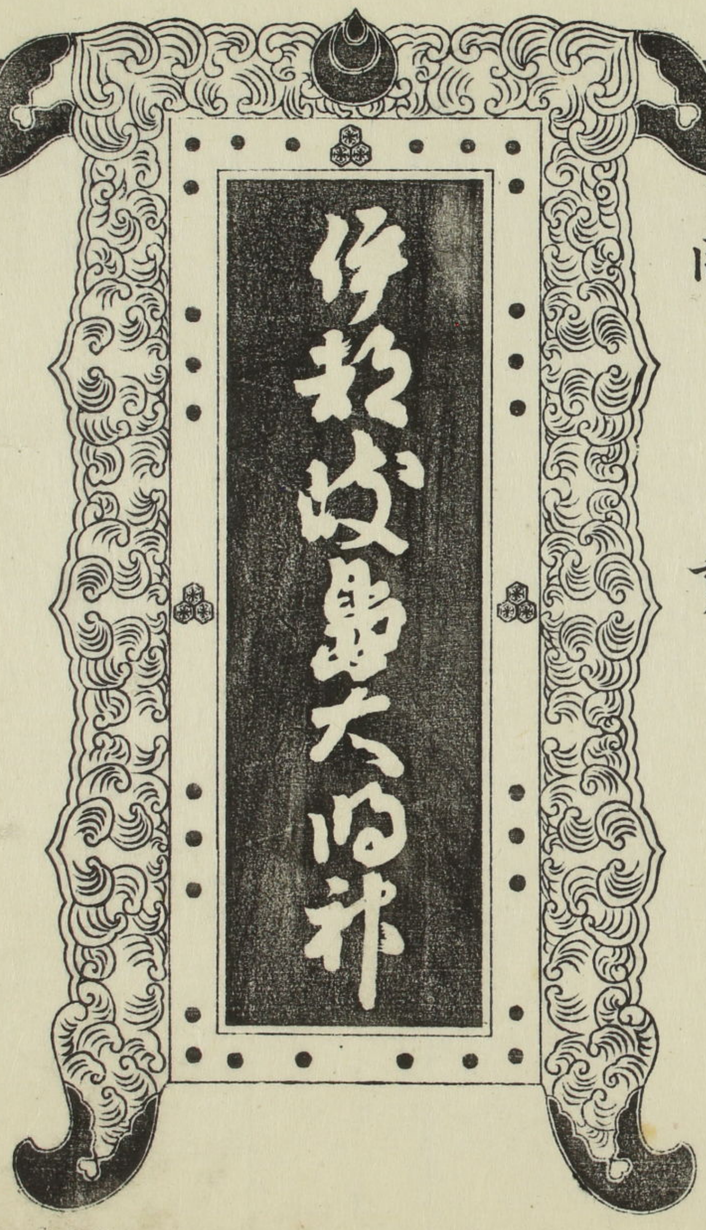
大内義隆直筆の狀

多佐宇二家

大鳥居額　表



同　裏



因こ云額ふ字ハひとと訓り人ふたのすくにたのひくひと見て何某とそろぶどよれ殿門になぞみて速ふたの名をくるの義ふれつくぞ

○大鳥居ハ神前舌先ら百五十間去て正面海中ふたの潮の干るときを大半洲とかるく故ふ鳥居乃洲とふて此鳥居ハけ元年月あれざ一中興後鳥羽帝の御宇なんらてわへと有

それより此ち後奈良帝の御宇御造營天文十六年
丁未六月七日柱立九月二十七日上棟移徙ありて
大覺寺法親王この島ふ〻せ玉ふ供奉に萬如
えびらして歌ふみて奉る
みわの沼よすがら神の門や能のみやこたてぐらん
おなじ時
歳ふれはつやをたのふことばぐら　大宮棚守左近將監房顯
社のもりしつやきちひのひろの木　客宮棚守右近將監親尊
正德五年乙未の七月二十日夜鳥居顛倒を又元文四己未九
月再興のとき安永五年丙申七月七日祝融ふうりて灰燼
を享和元年辛酉再興今の鳥居こまこ寸尺往古とりに
ゆ面五間一尺高八間三尺親柱廻り一丈八尺五寸蓋木
長サ十一間袖柱高サ四間四尺廻り一丈三尺みゑ楠形

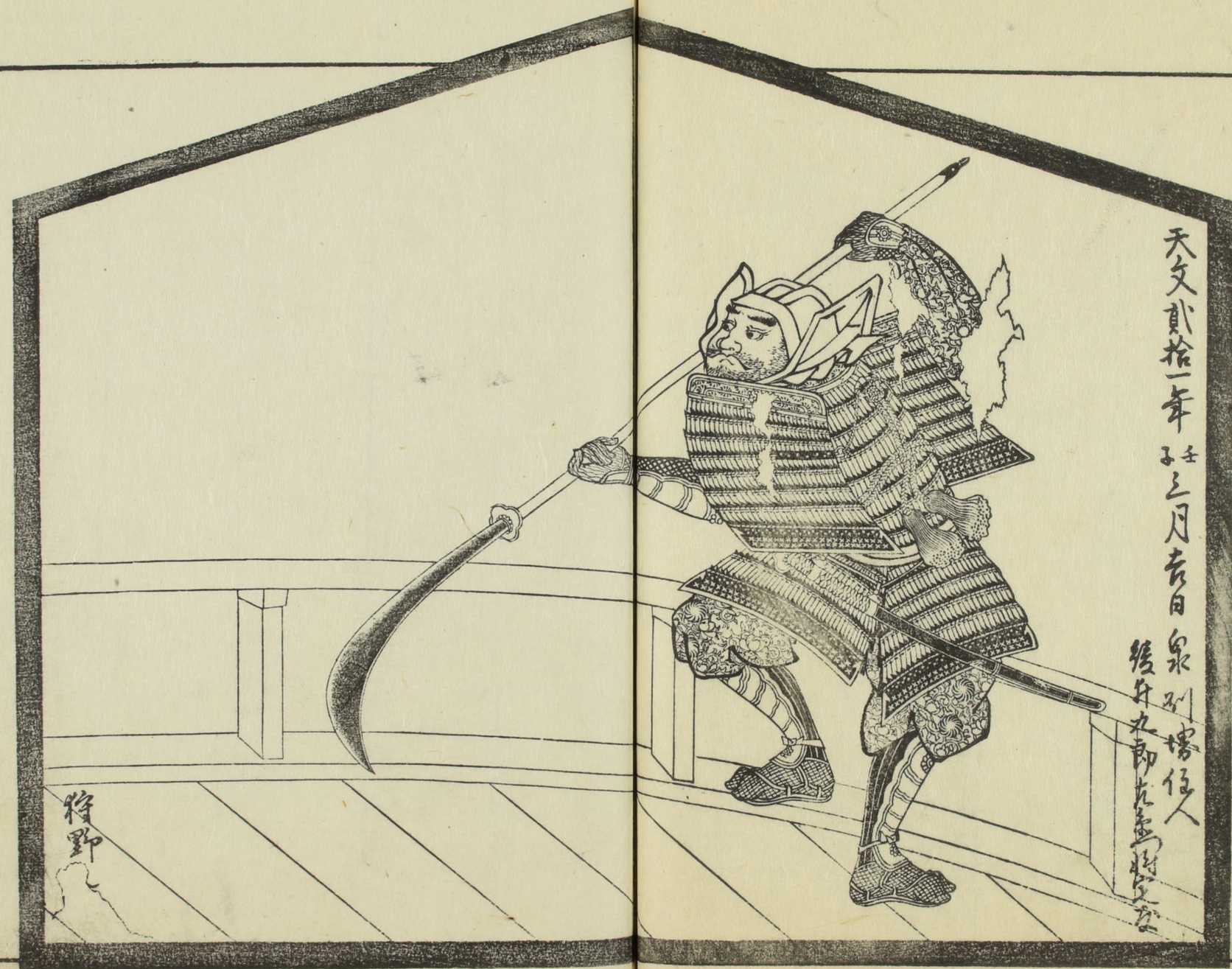
○橋辨慶の圖　竪三尺余　横三尺五寸　本社内陳の外正面ふ掲

天文二十一年三月吉日法眼元信筆　狩野元信ハ祐勢が子く
幼名四郎二郎後大炊介世ふ古法眼と稱をその名をろこしふ震ふ
毎年正月二日未廣扇ふ畫て柳營ふ獻る永正年中足利家に仕
永祿中歳八十四ふて没を

此繪馬ふく世ふ人をるとろにて甚不思議なり元祿己前折
く夜更て戰ひの音して神前騒ゲしく翌朝これを見まハ太刀
長刀の緑色損じて神前ふちゝぐと度〻ゝ社司おどろきて
牛若辨慶の中を隔て餘の額を掲くそれとり事止ぬとぞ
是元信の筆妙感をふ餘なりとゝ傳ふ
○牛若丸ゝ左馬頭義朝の子母ハ大和源氏宇田左衛門尉が

本社内陳の外正面ふ掲

竪三尺余
横三尺五寸



女常磐の前へゆく時常盤の夢ゑ大威徳明王牛ゑ乗りて
来りゑひるゝるの牛俄ゑ利劔と化りこの利劔を明王よ
りたまはること見て懐胎し平治元年二月二日洛北紫野郷ゑ
て誕生せり因て牛若丸と名くゝゑをり平治乃亂ゑ父義朝
平清盛と戰ひ敗死の後清盛常磐の艶色ゑ迷ひ召入むと有
りゝ紙否といゝて其身いまと今若乙若牛若の三人の嬰兒も
俱ゑ誅されん事を歎きて心ゑらむも清盛ゑまぐひくりはて
三人の小兒をゝ皆法師ゑやよの事ゑれば先兄二人を法師
ゑなし牛若も七歳ゑて鞍馬の東光坊の阿闍梨圓忍ゲ弟
子とゑり名を改て遮那王丸とゑひるゝその後得度の事
を進むれども不肯して學問乃暇ゑ兵法武邊のこゝを

のこゝ心ゝて常ゑ鞍馬の奥ゑる貴船明神へ參詣ゑるひゑゝ
ゑるゝ僧正ゲ谷とゑゑるゑてこの山乃大天狗ゑ兵法の奥義
を相傳ゑひるゝゝや又鬼一法眼とゑゑ陰陽師ゑりをゑらし
け黄石公ゲ張良ゑはゝくゝ兵書を授ゑるひゝと後ゑりを
九郎判官義經とて日本無双の兵法達者の大將軍とゝ申
ゑる

○辨慶ゑ紀州の住人岩田入道寂昌ゲ子く仁平元年四月八日ゑ誕
生ゑ叡山の西塔櫻本坊の辨長僧都の弟子と形ゑ常ゑ力ゑぎ
太刀ゑちをゝを好ゑゑて鬼若丸とゝ異名しゝるゝゝ頃西
塙の北谷ゑ武藏坊とゑへる空坊へ入て自剃髪し武藏坊辨慶
とゝ名ゆりる○安元二年六月十二日夜五條の天神ゑて牛

牛若辨慶の間に掲

竪二尺五寸
横三尺余

元禄八年乙亥極月吉日

彫刻もの

田子氏桜木屋正榮

若辨慶はじめて出會ふこれとき牛若十八歳辨慶二十六歳へ辨慶邑〻と牛若を嘲哢せり終ふ口論とるり互に打もの〻勝負ふ及ぶるぶ辨慶不叶して帰ぬり同十七日夜五条の橋ふて往逢うるの回ち負たらん方従者とふらんと約諾して戰ふ是時もうち負て遂ふ牛若を主君と仰ぎ奉り義経の御内ふて第一の剛のものと呼き奥州衣河ふて義経討死ちもひるる時までも隨身奉るおるふ儘の働して討死し名を後代ふ残しるる文武二道の達者〻

（已上義經記等諸記ノ意を取）

○朝比奈草摺曳之圖 竪三尺五寸 横三尺余 牛若辨慶の間ふ掲

元禄八乙亥極月吉日 細工木額作者不知これを彼中間に掛る

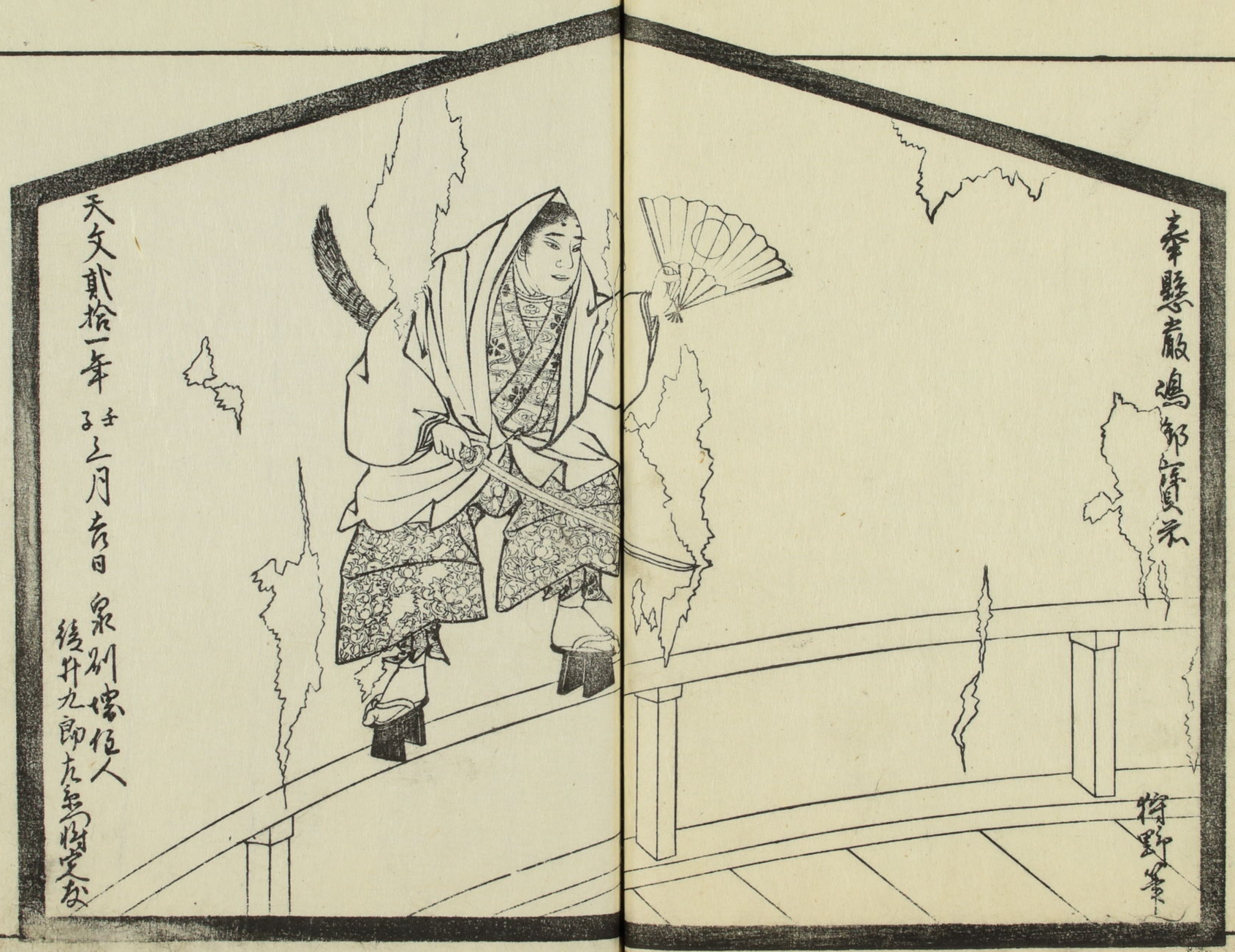
事ハ前に志るしぬ

○朝比奈三郎義秀ハ和田小太郎義盛が三男なり 母ハ木曽義仲の妾巴なり

巴ハ圓寺の合戰より後世まつまりて右大将家へ召され三浦大助がはて後越中ふうえ出家して巴尼と改歳九十ふて死ぬ

○曽我五郎時宗ハ豆州の邑長河津祐泰が二男兄を十郎祐成と云ひ母ハ土肥氏祐泰が死後曽我太郎祐信ふ再嫁し二人の子をもちてゞ行故ふ繼父の姓氏曽我を名乗とぞ

建久四年義盛ほまとの一族をひきゐて大磯の遊君が家に酒宴をもよふし虎と云ふる遊君を慰んとすもの虎をゝして十郎祐成とこゝろふき契をもちたりふ祐成みくもれバ和田が座敷へ出ざるを朝比奈に命じて十郎と俱ふ招き出ス和田大ふ悦


奉懸嚴鴻郭寶永
狩野筆
天文貳拾一年壬子之月吉日
泉州堺住人
後井九郎左衛門尉定友

虎ふみくれ虎ゞ盃をとゝりの外虎を親しき十郎ふ醜を和田
大に憤らるれ盃他へとゝ投ゞと苦くいひれをたゝまゝ大事
らそ起られと各手ふ汗をそ握りゝ此時弟の五郎時宗を
曽家ふ行て頻ふ心驚ぎ兄祐成今大磯ふ行ふふゝゝゝ
もれれいそやおきてみんと緋威の腹巻投ゞ馬ふ鞍ふく
ゝはけれく驛馬ふうち乗二十余丁を一鞭ゝ大磯に駐著
て見をゞ和田と十郎とけらきの論最中ふりすゝやかゝいで
きゝゝと五郎ハ垣を跳越十郎ゞ居ゝ背後の障子を隔て
すゝとゝをゝ和田をけゞん皆悉討て捨ん と窺ゝ朝比奈
をやゝされを悟もゝゝ親しき中ゝれを由ふきゝゝ引出
さんゝいゝも無事をゝゝんと扇をさゝとひゝき何とやらん

坐敷寂然ゝ謡へ囃やゝゞ舞んと立ゝ五郎ゝ前の障子を礑
と蹴けゞ五郎を二王の如く立居ゝ朝比奈舞に執成客人ゝ
へ入らせむへと五郎ゞ草摺を無手とひく五郎ハ曳もゞと身をかゝ
少しも不動假令盤石をゝも三郎ふゝ動をまゞけゝと怪力ふ
任せひきけるに横縫草摺ばゝくゝと一度ふ切ま三郎噇と倒れゞ五
郎をゝ立ゝ人ゝ笑を催しゝされゝくゝと請れゞ辞退
ゝ無禮ゝ坐鋪ゝ通ゝ暫時酒宴をゝとゝゝかゝゝて此再會
と十郎と俱ふ立ゝれゞ和田を下野の國へと通ゝとゝ

傳書大略ハ草摺引

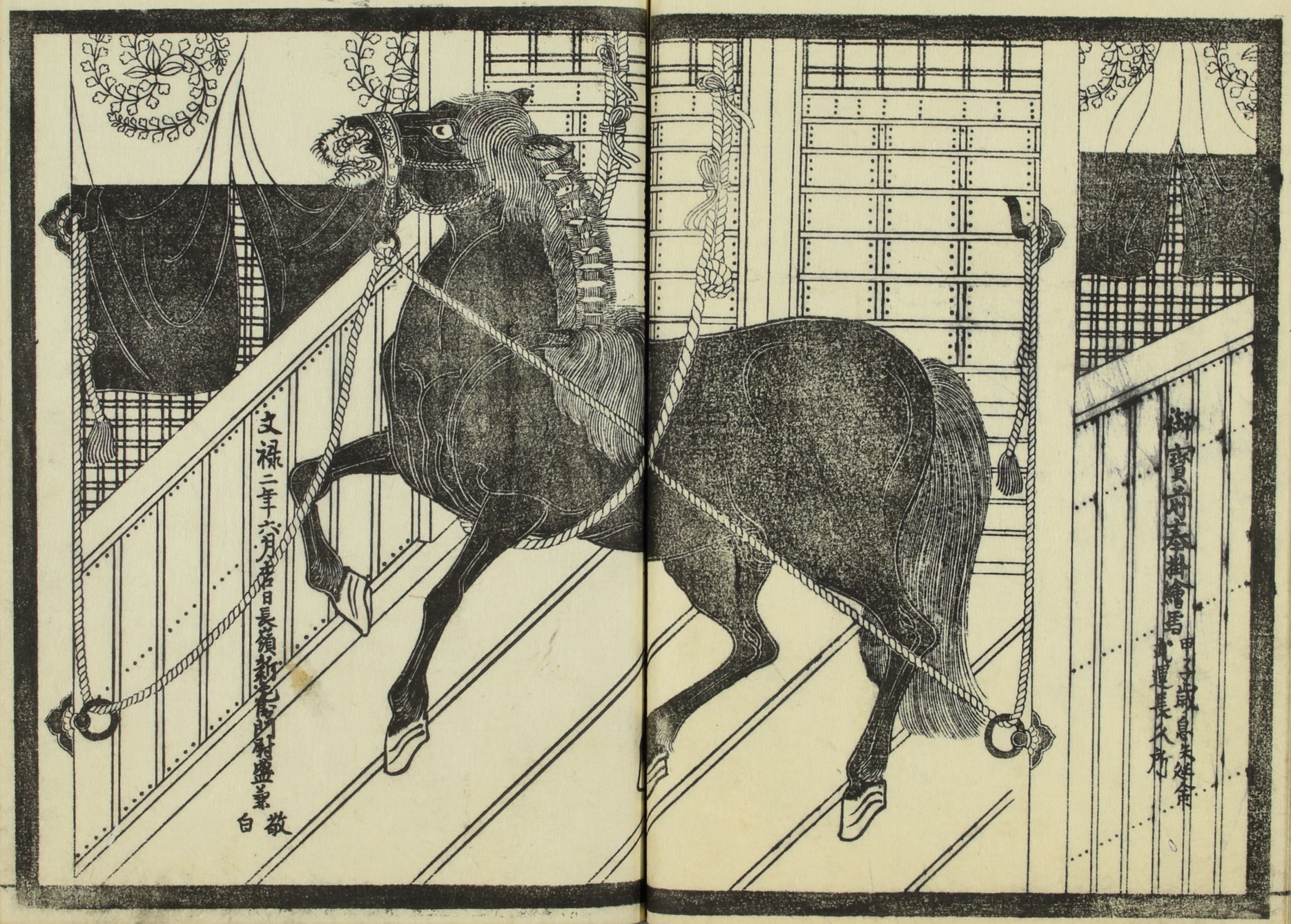
○田植の圖　竪九尺余　横二間余　本社内陣正面脇に掲
正徳癸巳九月穀旦狩野永叔筆　永叔名主信稱右京法眼位ふ叙に

人民之具矣
重於食先王
藉田以率厥
力矧予小子服勤
述職夙夜懋厲
懼墜成式
赫赫
神顧鎮茲疆
總金地極彩色
域雨暘水旱
罔求不得敬
誠丹書仰
祈黍稷秉
者臨金戒撫
綏惕德
正德癸巳九月穀旦

初の名敏信又明信とも云永真の孫時信が子なり時信早世なりて永真
を嗣

田植は本朝食鑑に云凡四月五月の節前に苗を種く粢を蒔
てより三四十日に至りて苗を生ずる事七八寸或は尺余これを
采て植田に移すこれを早苗と稱す中略苗を種ゑて先早乙
女の修錬せるものを選んでこれを種ゑむ其修錬の足ざれ
ものは田に利なし　○紀事曰女子苗を樹るものを早乙女と
云各これを揚ることを田種哥と云　○又玉苗とも
云　○あまもりけれ卿家の歌合に
小山田のいまだ植てもあらぬ乙女がもてはやされて
うたりめ　仲實王　稱美の詞なり
御田植は摂州住吉神社の御田植は五月二十八日なり　摂陽羣談
に云御田を植る故に神事あり相傳神功皇后三韓を征し給ひ
御歸陣の時長門の國にて植女を召して五穀の農業の事
を世に廣く教ふ後世末流乳守の遊女となるまでなれるなり
傾城今は早乙女を勤るなり

○厩馬の圖　竪三尺　横三尺五寸　本社大床の上に掲
文祿二年六月吉日　作者不知
釋名云厩は生馬の聚る所なり日本紀云天武天皇十三年閏四月
詔して曰く凡政の要は軍事なり是を以て文武官乃
諸人務て兵を用ひ及び馬に乘ることを習へ　○本艸
に時珍が云安は許慎が云馬は武なり　○周禮に云凡馬八


文禄二年六月吉日長嶺新左衛門尉射盛業 敬白
御寶前奉掛繪馬 甲子歳息災延命
武運長久所

尺已上を龍とし七尺已上ハ騋あり六尺を馬とすといへり馬に數品
あるも騝 騟 驒 驄 騂 駱 騆 驪 白
馬 駂
環眼馬あり厩に養ひて衆馬の凶災を避くるといふ吉相乃
うまなり毛色白にてまなこを赤し老めるなど照る眼乃
うち朱乃如く睛くろく白きふちあり
今此圖の馬を雒あり 黒身白鬣立髪
右驪と駂と白馬との三神馬に用ふ
結數二十八又ハ
三十六ともいへり

○内侍の圖 竪三尺余 横二尺五寸 西廻廊に掲く
寛保四甲子歳三月吉日作者しれず
此圖何なる故事を知らずし往古當社神樂の節明神内侍
にまじはりて現じ玉ふことありとぞ申傳へり恐らくは其圖ならん
か其詳未考

○鷹の圖 竪四尺余 横三尺 本社大床の上に掲
慶長五年庚子五月吉日作者不知
鷹本綱云鷹 膺をもて物を撃ゆゑに名づく 鳥の疏暴なるものゆゑに或云鷹尾
十二枚長さ五六寸よく合せて末ハ圓黒白の重紋あり天寒に遇
ふ時ハ尾を畳むと一枚のごとくなり尾損ずるときハ漆樹の汁を取
以他の鷹の尾を接尾の下に三品の毛あり尾末毛といふ亂糸
狹衣の下れ尾を石うちと云尾の端の白きもの杓華といふ背
の毛を母衣毛と云其脓に出る白毛を芽花と云此脇の服の
毛を歯黒付と云肘の内の毛を水掻毛と云脚に韋緡を著
るところを毛なし脛といふ共にみな俗稱なり
因云仁徳帝四十三年秋九月阿弭古といふ異鳥を獻る百濟の酒の公に
くまをやしなはしむ酒の公ゆるしがれをその尾に鈴をその尾に付

大宮西ノ廻廊ニ掲

竪三尺余
横二尺余

寛保四甲子歳三月吉日

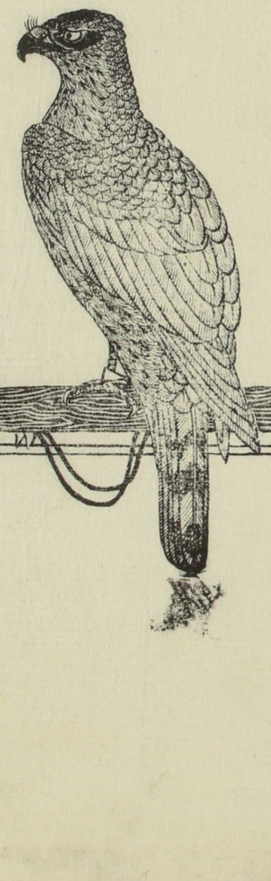
作者不知

大宮大床ノ上ニ掲

竪四尺余
横三尺

嚴嶋御寶前諸願成就皆満足

慶長五年庚子五月吉日癸酉敬白



奉懸

剞劂氏山口宗五郎
彫工名古屋伊三郎

恭惟
天杵島姫命
神聖

て腕乃上ニ居てこれを奉るとぞ
是日本たゝ匠のはじめなり

○鷹ニ數品あり　角鷹　佐之婆　隼　鶻　鵰　雀鷂　兄鷂

鷂

はしたかのさゞろもの毛をもつて形丸きこゝろに作る　定ム
無爲のけうのねがひまことおのれとはよ神の心ぞ豈誠
ちさきもとろたふさまきうたゝんもろこゝろ右ハ丸きこゝろ法に

○石川丈山の書　竪横　本社組入東向ニ掲
如圖

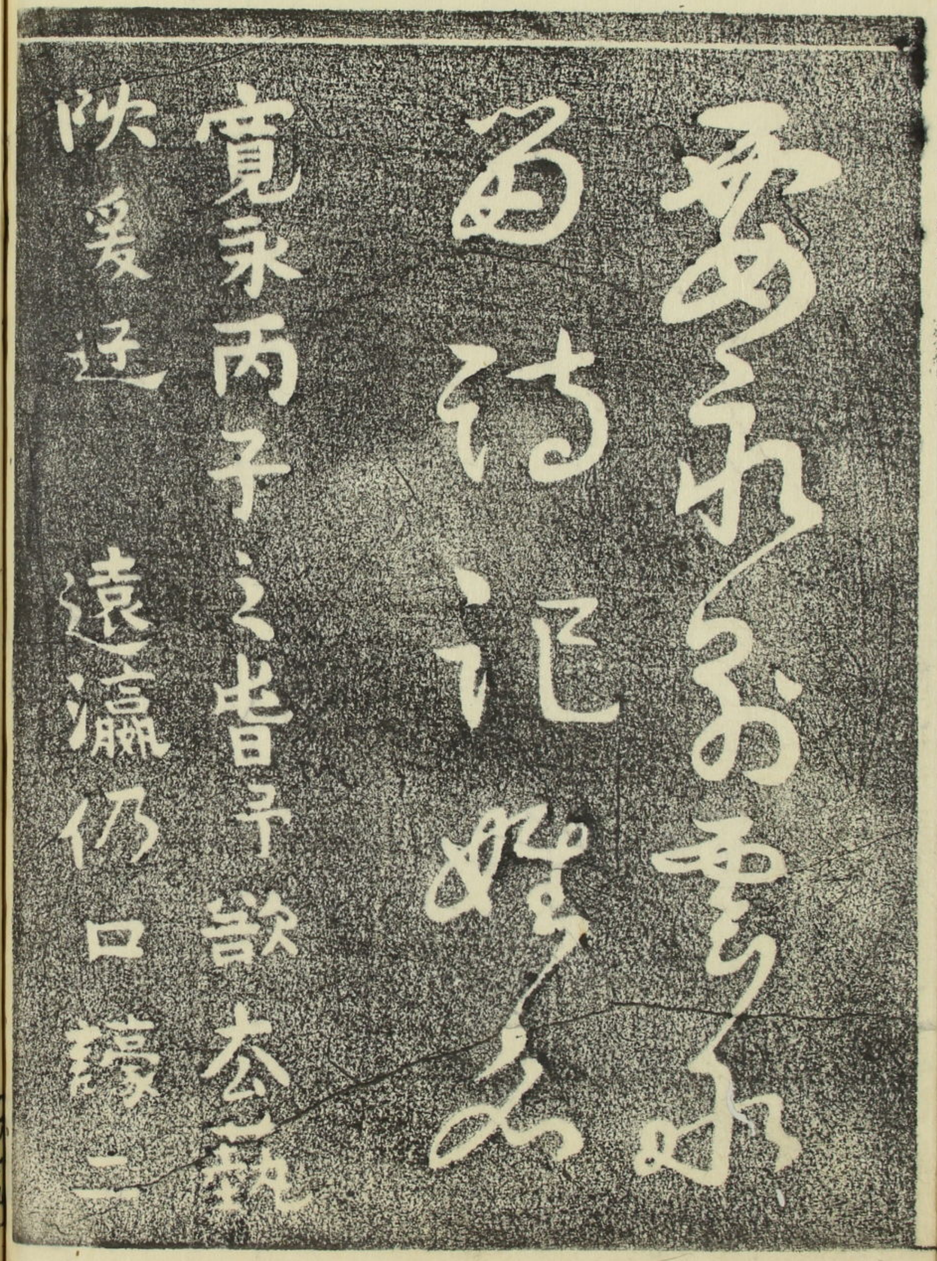
寛永丙子の春丈山自彫刻して是れ掲
石川氏名重之字四號四凸窩とゝひゝと六々山人逋僊烏鱗子
大拙山村山木藪里翁東溪道人三足老人拙窩居士等其
書々々に記するものあり俗稱嘉右衛門左近衛ニ改む奉州

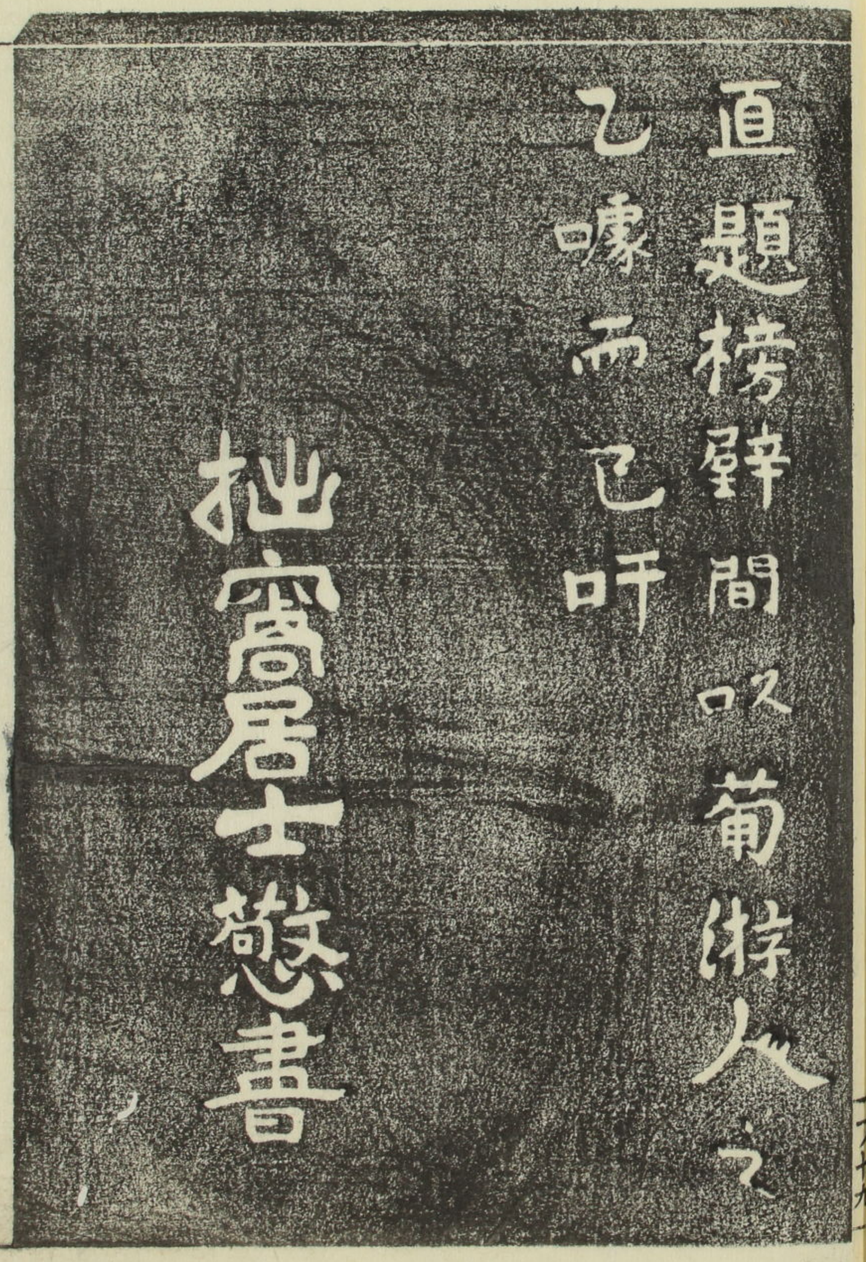
壘壁益壯哉
廟兒巍巍浮
海氷

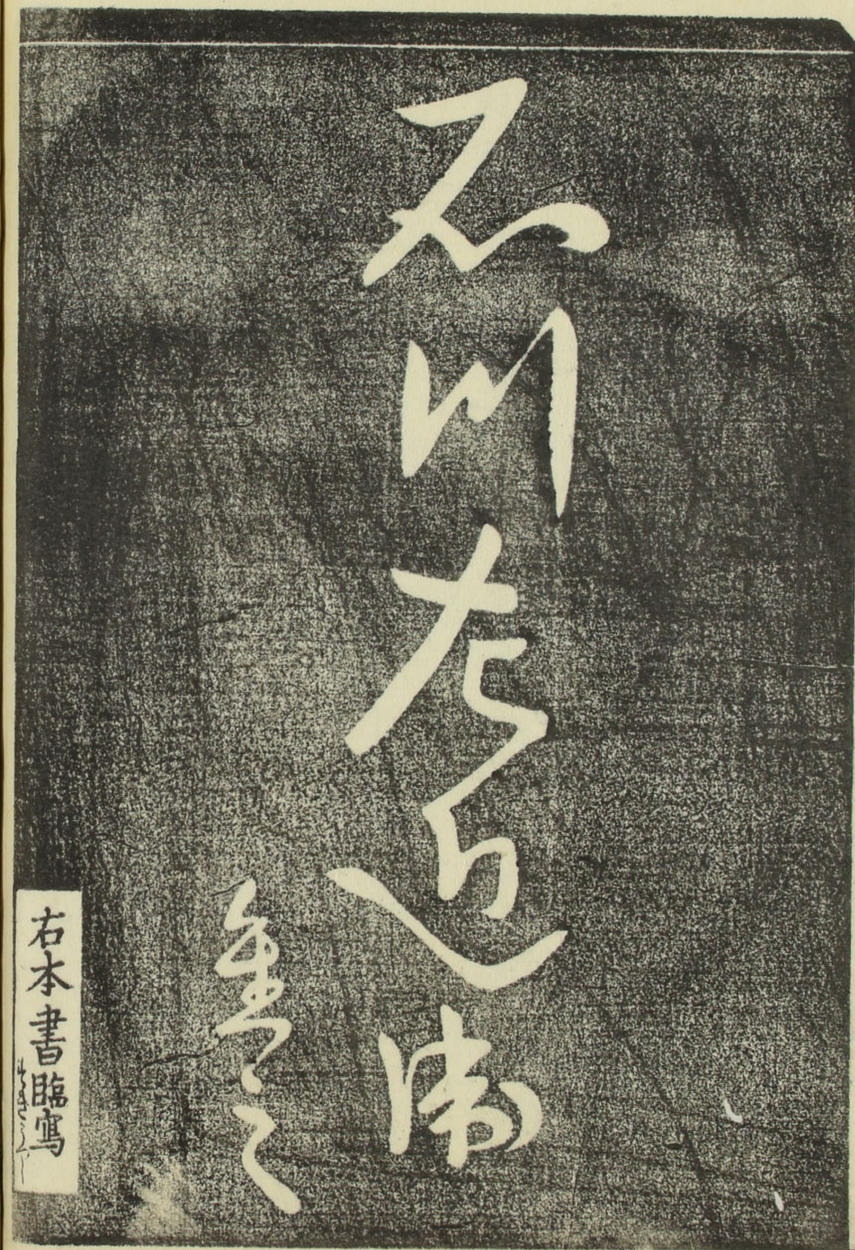
怪看歷氣佐
樓臺
同

江山依稀係念
月來夢書
偏見鳥語

仍字猜鵲噪
夕昇惟謀
風勢參差


寛永丙子
陝爰迂
遠瀛仍口
二


直題榜辟間吸菊俳人之
乙嚮而已吁
拙窩居士慾書



右裏ふ

右本書臨寫

碧海郡泉の郷ふ産代々濱松麾下の士其先源義家第六子左兵衛尉義時石川と稱せしより嗣で氏とす寛文十二年壬子夏五月二十三日享年九十歳にて沒す

因云丈山初め惺窩先生ふ道を學び羅山子杏庵玄同の輩とともにて詩を善し書をよくす日枝山の麓一乘寺村詩仙堂ふ蟄居等の事委しく奇人傳等ふ見えたり○或説ふ丈山大坂御陣の時軍令ふ背御勘氣の後廣島住居やと其詳ふる未考ぶれどもこゝに

○三福神の圖　竪九尺余　横二間余　本社内陣正面右脇ふ掲

元祿十五年壬午正月元日常信畫　常信ハ養朴と号し右京と称せ又耕寛齋青白齋の號あり又古川と称す壬馬尚信の嗣一時の名手正

德中七十八歳ふて沒す

總金地極彩色

奉寄附
御寶前

嚴肅整齊

竪九尺余 横二間余

首替所

元祿十五壬午年正月元日

○大黒天ハ天部ニ兵家ニ在軍利を施し民家に福をあたゝ
故に常に尊信供養をべき尊神なり昊に佛説摩訶迦羅天
黒天神經に見ゆ○摩訶迦羅を唐の言に大黒天神と譯す大
神力有て壽無量千歳とゝ（今諸寺の食厨にまる）一説に大黒を大己貴
尊袋を負て稲羽の國氣多碕にいくり五に事あり大己貴一
名大國主の神とふ大黒と大國と音相近し大國を持ところ
ふくを福神と祀るゝ故に大黒を即大己貴の尊とゝ
○壽老人風俗記に宋の元祐の間京に一老人あり長三尺首と
相半ふり秀眉豐髯幅巾埜服市に賣トを錢を得る時に
飲あるひを其頭を叩てふ吾身を壽を益を聖人く一日
中官見て異くとして其形を圖して上に奏を上旨ありて内殿
に召て問のふ今幾年ぞ老人の臣に南方より來る酒に酩酊
醉てよく言よりて賜ふて飲まむ一擎一石徐々として云黄河屢
清を見る上眷方に渥し俄に其人を逸ぬ但覺清風庭に滿白
雲空に映ぬるを聖朝太子奏して壽星の躔客に帝坐に聯る
上益これを異こまひ方に知る見ところの老人を壽星なるを
探訪ども竟に得べからゝ
○福祿壽を傳ふ邪和璞終南山に廬を人の心を筭るの術を得
たる暴死をるものを活を道を學ぶもの多し一日弟子崔曙に
謂て云異客來んと翌日はして一人至る身の長五尺濶さ三尺
首その半ばあり緋衣に笏を執て髯を鼓して大笑を召用
耳を侵して劇談を多く人間の語ふあらぬ崔曙趨て庭を過

客熟見て和璞ふ謂て云これい泰山老師ふいらぶや云然食〳〵畢て去る
和璞曙ふ謂て云是ゝ上帝あり臣ふ戯れて泰山老師とふ子復
よゝ省や曙ゞ云向ふ先生の言を聞ふ某を泰山老師の後身とも
れども前身記ぶとを得ず璞後ふ往所をもらぶと云〻
因云風俗紀ふ南極老人星とふい前ふ云壽老人のとゝ壽老人を福祿壽
と本同一体ゝるべ〻是故ふ或説ふ七福神の内壽老人を略て吉祥天を畫く
○吉祥天い佛説大吉祥天女十二名經ふくはし
或説ふ福祿壽とて別ふ短身長頭の人有べらぶ但人相頭の法ふ依て祿と福と
壽ゝの三相を顕〻畫るもなり〻壁ゝい面の相ふ多壽多幸多福れ相あり て額頷
両頰を以て鼻を包の相を多福の相と云ゞ如く世に云ふ多福とて別ふ本物の一女ゝきゞと

嚴島扁額縮本初編卷之一終